



倫理的に成熟するための遂行的概念

「ことばとは何か」の著者、内田樹さんの近著『困難な成熟』（夜間飛行、2015）は図書室にも入っている。その冒頭は、

「責任を取るといえることは可能でしょうか」 僕の答えはシンプルです。「不可能です」以上、おしまい。シンプルですよね。でも、どうして責任を取るといえることが不可能なのか、その理路を語るためには、ずいぶん長いお話に付き合ってもらわなければなりません。」

と始まる。興味深い責任論で、内田さんはズバリ「責任はとれない」というのだが、ではどしたらよいのか、結論を引用してみよう。

＊

きちんと機能している社会、安全で、そこそこ豊かで、みんながルールをだいたい守っている社会に住みながら、かつ「責任を取ると人を人から求められないで済む」生き方をしようと思ったら、やることはひとつしかありません。それは「オレが責任を持つよ」という言葉を言うことです。

考えればすぐにわかります。構成員全員が「オレは責任ないからね」と言い募り、不祥事の責任を誰かに押しつけようと汲々としている社会と、構成員全員が自分の手の届く範囲のことについては、「あ、それはオレが責任を持つよ」とさらっと言ってくれる社会で、どちらが「誰かが責任を取らなければならないようなひどいこと」が起こる確率が高いか。

まことに逆説的なことではありますが、「オレが責任を取るとよ」という言葉を言う人間がひとり増えるごとに、その集団からは「誰かが責任を取らなければならないようなこと」が起きるリスクがひとつずつ減っていくので

す。集団構成員の全員が人を差し置いてまで「オレが責任を取るとよ」という社会では、「誰かが責任を取らなければならないような事故やミス」が起きても、「誰の責任だ」というような議論は誰もしません。そんな話題には誰も時間を割かない。だって、みんなその「ひどいこと」については、自分にも責任の一端があったと感じるに決まっているからです。「この事態については、オレにも責任の一端はあるよな」と思って、内心忸怩たる人間がどうして「責任者出てこい！」というような他罰的な言葉をべらべら口に出すことができるのでしょうか。

責任というのは、誰にも取ることはできないものです。にもかかわらず、責任というのは、人に押しつけられるものではありません。自分で引き受けるものです。というのは、「責任を引き受けます」と宣言する人間が多ければ多いほど、「誰かが責任を引き受けなければならないようなこと」の出現確率は逡減してゆくからです。

どのような社会的な概念も、人間が幸福に、豊かに、安全に生き延びるために考案されたものです。「責任」という概念もそのひとつです。

「責任」は、「鍋」とか「目覚まし時計」のように、実体的に存在するものではありません。でも、それが「ある」というふうに考えたほうがいと昔の人は考えた。それをどういうふうに扱うのかについて、エンドレスに困惑することを通じて、人間が倫理的に成熟してゆくことを可能にする、遂行的な概念だからこそ、作り出されたのです。